Library 合気ライブラリー ⑩

文:松崎司

スプリット

著者
カルメン・マキ
甲野善紀
名越康文

新曜社
(03-3264-4973)
■B6判
■240頁
■本体 1800円

それにしても、アクの強い3人が集まったものである。武術家と精神科医とロック歌手。一見、どこにも共通点のない男と女が限りなく裸に近い自分をさらけだしながら、それぞれの生い立ちをはじめロック・家族・偶然と必然・運命の定と不定・いじめ・暴性・プラス思考・恋愛、などなどの話題を各々の強烈な個性のままに何一つ省うことなく素直に、誠実に語りつくす。

本書は甲野善紀師のプロデュースによって成立した。「本書刊行のキッカケは、一昨年の春、カルメン・マキ　ライブの後の打ち上げでマキさんとしばらく話す機会が持てた折、マキさんから『私は以前、精神科医になりたいと思ったことがあるんです』という話をうかがったことによる」

名越康文という精神科医の"大親友"を持つ甲野師は、「これはぜひとも、この御二方の間をとりもち、できれば私もそこに加わらせていただいて、三人による鼎談はできないものだろうかと、フト思いつき、まず名越氏に話を持ちかけた」——

紆余曲折をへて誕生した本書は、三つの強烈な個性が反発するでなく、安易に融和するでなく、各々の存在を保ちながら他を照射するという理想に近い形に落ち着いたと言える。

カルメン・マキ、名越康文、そして甲野善紀——

この3人に共通するのは拭い去りがたい"陰影"である。強烈な"負の資質"である。

「うちは貧乏だったのに母が無理していい学校にあげたくて、中学からミッション系のお嬢さま学校に行かせたんですよ。(中略)そういう所で、合うわけがないんですよ私が(笑)」

混血児として生まれたカルメン・マキは周囲の好奇と偏見にさらされながら成長する。学校を中退し、歌手として『時には母のない子のように』のヒットを飛ばした後にロックに転向、ファンを驚かせる。

「(前略)マキさんの怖さというのは、『他者と出会う』という一見誰もが日常的にこなしていることを、もう一度まともに見つめさせるような、そんな力にあると思うんです」(名越)　本書ではその存在自体が重力場のように男二人の言葉を誘導する。

名越氏は父親とのすさまじい葛藤、バグワン・シュリ・ラジニーシに弟子入りした経験を語り、カルメン・マキと自分がかつて熱中したロックの話題を展開させる。ジャニス・ジャプリン、ジミ・ヘンドリックス、ジム・モリソンといったロック界の巨星たちに向ける尊敬と愛情と洞察は、両者とも大変なものがある。

甲野師は本書でも「運命の定・不定」「"プラス思考"のワナ」といったいつもの話題を展開するが、カルメン・マキの歌声によって"体が割れる"と本人の前で技を実演する。それを受けた名越氏が武術における"感受性"の大切さを力説するのが、興味深い。

3人に共通するのは一般的なステレオタイプな思考の筋道に疑問をもち、解体し、自分にとって本当に納得のいく思考思索を構築する姿勢である。"世間"に強烈な違和感を抱いていた彼らには、自分の思考や思索を安易に世の標準と添わせることなどもとより不可能であり、一見屈折しているかに見えるその視線は、たやすくは世間一般にからめとられぬ心魂の強さを物語っている。

おのれの純粋性を保つために無意識に闘ってきた彼らには、まったく異なるフィールドにいながらにして、同類の匂いが漂っている。

題名は『スプリット』(裂けること・分けること)だが、3人ケンカしないでよかった。